

Introduction To Sumerian Grammar シュメール語文法入門

Volume.III
コピュラ
副詞と数詞
副詞の格

Daniel A Foxvog
ダニエル A フォックスヴォグ

Translated by uyum
訳 ゆー

INTRODUCTION TO SUMERIAN GRAMMAR

DANIEL A FOXVOG

LECTURER IN ASSYRIOLOGY (RETIRED)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA AT BERKELEY

Revised January 2016

Cuneiform Digital Library Preprints

<http://cdli.ucla.edu/?q=cuneiform-digital-library-preprints>

Hosted by the Cuneiform Digital Library Initiative (<http://cdli.ucla.edu>)

Editor: Bertrand Lafont (CNRS, Nanterre)

Number 2

Title: "Introduction to Sumerian Grammar"

Author: Daniel A. Foxvog

Posted to web: 4 January 2016

目次

第7課	コピュラ	1
	前接コピュラ (§541-546; §108)	1
	コピュラの別の機能	6
	定コピュラ (§536-540)	8
	<small>finitecopula</small>	
	定動詞としての前接辞 nu-	12
	覚えていて	13
第8課	副詞と数詞	15
	副詞 (§84-89)	15
	様態の副詞	15
	<small>adverbs of manner</small>	
	時間的、因果的、局所的な副詞表現 (§184; 101; 205)	18
	疑問表現	19
	副詞文	20
	数詞 (§139-142)	21
	基数詞	21
	<small>cardinal number</small>	
	序数詞	22
	<small>ordinal number</small>	
	数の表現	22
	覚えていて	23
第9課	副詞の格	25
	絶対格 -Ø (§38-42; 169)	25
	能格と位置・終止格 -e (§170-174)	25
	与格 -ra (§175-179)	29

位格 -a (§180-186)	32
共格 -da (§188-194)	34
奪格・具格-ta (§203-212)	36
終止格 -šè (§195-202)	38
複合動詞と、動詞補部の標準支配	41
覚えていて	43
付録 A 練習問題	45
練習問題 3 コピュラ、独立代名詞	45
練習問題 4 副詞格、副詞的表現、指示詞	47
文献	49
索引	51

第7課 コピュラ

シュメール語には二つの「～だ、～である」動詞があります。一つは「在る」を意味する動詞の語根 *gál* です。もう一つは /me/ や /m/ の形の統語的要素で、コピュラ、つまり非動詞文や名詞文の述部を示す機能があります。コピュラは二つの名詞または名詞と形容詞の同一性を示すもので、それらを主語と述語として結びつけます。たとえば「私は王である」とか「王は素晴らしい」で、一般化するならば「X=Y」となります。シュメール語のコピュラに時制の概念はなく、文脈に応じて「である」「であった」などと訳すことができます。コピュラは前接語（必ず他の語の後に置かれる非強勢の要素）で、より正確には名詞文の二番目の語（述語）として現れます。単純な文脈ではコピュラの使用は任意で、省略されることもしばしばです。

前接コピュラ (§541-546; §108)

前接コピュラは自動詞主語と同じパラダイムで変化します(後述)。このパラダイムでは三人称単数の場合は人称主語と非人称／集合主語の両方に対応し、三人称複数形は人称主語にのみ対応することに注意してください。

2 第7課 コピュラ

単数形

1	me+(e)n	> -me-en	私は～である
2	me+(e)n	> -me-en	あなたは～である
	m+∅	> -(V)m/-ām	彼／それ／それらは～である
3p/i			古シュメール期では-am ₆

複数形

1	me+(e)nden	> -me-en-dê-en	我々は～である
2	me+(e)nzen	> -me-en-zé-en	あなた方は～である
3p	me+(e)š	> -me-eš	彼らは～である

コピュラの形を説明するうえでの古くからの問題は、三人称単数以外の代名詞要素に現れる/e/の母音を、コピュラの語幹/me/に属するものとして分析すべきか、代名詞要素、すなわち-enや-ešに属するものとして分析すべきかという点です。前者の場合、語幹/me/の/e/は三人称単数のとき削除されます。後者の場合、コピュラの語幹はすべての場合で/m/になります。後述する定コピュラfinitecopulaに現れる/me/という異綴variantを考慮すると、異なる文脈で現れる/m/と/me/という二つの異形態allomorphを仮定するのが最も簡単な解決策となるでしょう。本書はこの立場をとります。シュメール語の文法接辞の体系において意味は主に子音要素によって伝達されるという本文法書の一般仮説に沿って、私は、これらの主語代名詞が定動詞形finite verbal formとして現れる場合と同様に/e/は（歴史的に）子音要素の間に置かれることで発音可能にする挿入母音epenthetic vowelまたは助母音helping vowelであり、自動詞主語のパラダイムは-(e)n、-(e)n、-∅、-(e)nden、-(e)nzen、-(e)šのような単純な形式であると主張します。なおここでも記号∅はゼロ形態素、すなわ

ち主語が三人称単数形の場合に標識が現れないことを示します。

三人称単数のコピュラに先行する語または文法接尾辞が子音で終わるとき、挿入母音/a/が子音と後続のコピュラの語幹/m/を分けま
す。その結果、-àm(A. AN) (グデアの時代以前は-am₆(AN)) と表記さ
れます。たとえば lugal-àm 《彼は王である》です。音節/am/は、た
とえば lugal-lam のように閉音節記号 Cam¹⁾を使って先行する子音
と結合することもできます (ここでlが二重になるのは正書法上の慣
習に過ぎません)。ただし lugal-la-àm のように、2つの音節で書か
れる方がよく見られます。また先行子音が属格後置詞 -ak の /k/ の
場合、/k/ とコピュラは KAM 記号を使って一緒に書かれるのが一般
的です。

{ak+m} > -a-kam. 例: é lugal-la-kam それは王の家である

三人称単数のコピュラの前に母音がある場合は dumuzu-um 《彼は
あなたの息子である》や ama-ni-im 《彼²⁾は彼の母である》のよう
に/m/の前に挿入母音/a/を補う必要はありませんが、後世のテキス
トではこのような場合にも-àmと書く hepercollect 過剰修正 がみられます。後代
の、少なくとも一部の書記は音韻規則を見失って、-àmをあらゆる文
脈における三人称単数のコピュラの記号とみなすようになったよう
です。

古シュメール語では、三人称複数形は sagi-me-eš 《彼らは献酌官
である》(CT 50, 36 7:8) のように完全な形で書かれる場合もありま
すが、-me-ešではなく-meとだけ書かれるのが普通です。-me-éš(ま

1) 訳注:Cam は子音+am となる記号 (例では lam) を示します。

2) 訳注: 以前に案内した通り、本書ではシュメール語と同様に (そしてかつての日
本語と同じように) 「彼」を男女の別なく使用しています。原著では “she is his
mother” で、最初の彼は母を指しています。

4 第7課 コピュラ

たは-me-eš) という表記はウル第三王朝の後期からよく見られるようになります。古シュメール語での/š/の欠如が正書法的な現象なのか音韻論的な現象なのかは不明です。

グデア碑文やその他のウル第三王朝期のテキストでは様々な文脈で語末の/n/が省略されるのですが、一人称や二人称のコピュラも-me-enではなく-meと書かれることがあります。後述のテキスト例を参照してください。

以下の名詞文について調べてみましょう。

ġá-e lugal-me-en	我こそは王である。
za-e ir ₁₁ -me-en	お前こそは奴隷である。
ur- ^d namma lugal-àm	ウルナンマは王である。
nin-bi ama-ni-im	あの女性は彼の母である。
ad-da-ni šeš-zu-um	彼の父はあなたの兄弟である。
lú tur-e-ne šeš-me-eš	若い男達は兄弟である。
é-zu gal-la-àm	あなたの家は大きい。
munus-bi ama lugal-a-kam	その女性は王の母である。
é-bi ġá-a-kam	その家は私のである。

上の簡単な例では主語と述語に格の標示がありません。(代わりに、すべてが絶対格であるといえるかもしれませんが) コピュラ構文は非動詞文のため通常は副詞の格標識を伴いませんが、述語に対して名詞修飾の様格標識が付与される場合があります。

例： lú-bi lugal-gin₇-nam {lugal+gin₇+am} 《あの男は王のようだ》

コピュラ文やコピュラ節の主語が独立代名詞の場合、強調のため

に残されることもあります。通常は削除されます。例： <ġá-e>
 lugal-me-en 《私は王である》 逆に、コンピュータを代名詞の主語と組
 み合わせることでより一層の強調を表現することもできます。例：
 ġá-e-me-en lugal-me-en 《私は、我こそは、王である！》

実際のテキストからの例

ama nu-tuku-me ama-ġu₁₀ zé-me {nu+tuku+me+n}

a nu-tuku-me a-ġu₁₀ zé-me {zé+me+n}

私は母を持たない者だ。

— あなたは私の母だ！

私は父を持たない者だ。

— あなたは私の父だ！

(Gudea Cyl A 3:6-7 Ur III)

zé-e-me maškim-a-ni hé-me {zé-e+me+n} {hé+me+n}

あなたこそ、彼の検査官となるものだ！

(Sollberger, TCS 1, 128:6-7 Ur III).

PN PN₂-ra zi lugal ġá-e-me ha-na-šúm {ġá/ġe₂₆-e+me+n}

王の命（によって）、 {hé+na+∅+šúm+∅}

PN₂にPN³)を与えたものこそ私だ！ (与格の-ra は-na-を受けている)

(TCS 1, 81:3-7 Ur III)

3) 訳注: PN, PN₂はそれぞれ個人名を表します。実際のテキストではここに二人分の名前が書かれていたということです。

コピュラの別の機能

コピュラは ^dšul-gi-re lugal-àm é-gal in-dù 《シュルギ Shulgi(r) は王であり、宮殿を建てた》のように 同格 apposition や文中の挿入句を区切って示すことにもよく使われます。

ファルケンシュタインの見解によると、コピュラは強い強調を表すこともできます。(NSGU II^[10] pp.36-37, No.22:11 の議論と参考文献を参照) このような用法の例としては次のようなものがあります。

1 sila mun-àm ka-ka-né i-sub₆-bé {ka(k)+(a)ni+e}

1 クォート⁴⁾の塩であり、それは彼の口にすりこまれるだろう

(ウルナンマ法典 §25 Ur III)

文末や節末にコピュラが出現する場合も、おそらくは同様に挿入句や強調の表現と考えられますが、この用法はなかなか理解しにくいいため、翻訳では無視されることがしばしばです。

ハイムペル^[14](pp.33-36) は様格後置詞-gin₇ 《のような》とはまた異なる、比較を示すコピュラの用法について調べました。このような類似similativeを示す小辞particleとしてのコピュラについては、シュメール語とアッカド語の対訳語彙表に記載されています。

シュメール語: -àm アッカド語 *ki-ma* 《のような》 (原アア 8:2, MSL 14^[4], p89).

4) 訳注: クォートはヤード・ポンド法における体積単位で 1/4 ガロンの液量にあたり、およそ 1 リットル。

実際の例

udu ab-ba-ġá 180-àm ù gáb-ús-bi

私の父の羊、それらは 180 頭、そしてその羊飼い

(NSGU_[9] 138:8 Ur III)

PN-àm ma-an-šúm bí-in-du₁₁

それは PN であった、彼は私にそれを与えたと、彼はこれについて
宣言した。

(NSGU_[9] 127:4-5)

PN géme PN₂-kam, é-šu-šúm-ma ì-zàh-àm, buru₁₄-ka PN₃-e

in-dab₅

PN — PN₂ の奴隷であるもの — 彼はエシュシュマに逃れた — 収
穫（の時）にて PN₃ が捕らえた。

(NSGU_[9] 214:29-33)

u₄ inim lugal nu-ù-da-šub-ba-àm ba-sa₁₀-a{nu+n+da+šub+Ø+a+am}

王の言葉が彼に対して横たえられず、彼が売られた時

(NSGU_[9] 71:12-13)

PN PN₂-[da] nam-dam-šè-àm da-ga-na nu-ù-nú-a

PN が PN₂ と寝室で — 結婚状態としては — 寝ていなかったこと。

(NSGU_[9] 22:9-11)

gû-dé-a šà ^dnin-gír-su-ka u₄-dam mu-na-è

ゲデアにニンギルス神の考え(字義どおりには心)が陽光のごとくに出てきた。

(Gudea Cyl A 12:18-19 Ur III)

muš mah-àm a-e im-^{-m-}diri-ga-àm

それは大蛇のようであり、水面に浮き上がったものである

(Gudea Cyl A 12:18-19 Ur III)

定コピュラ (§536-540)

finitecopula

コピュラは、動詞の接頭辞や、嘆願法 ^{precativ}hé- 《～でありますように》や否定の nu- 《～ない》などの前接辞 ^{preformative}を加えることで、前接語 ^{enclitic}でなく准定動詞 ^{quasi-finite verb}として機能することもできます。

一般的な形は次のとおりです。

hé-em または hé-àm	{hé+m+Ø}
彼／それがそうでありますように！	しばしば hé-a や hé
nu-um または nu-àm	{nu+m+Ø}
彼／それはそうではない	しばしば nu
nu-me-eš	{nu+me+š}
彼らはそうではない	

例

kù-bi hé-a še-bi hé-a, ki PN-ta šu la-ba-an-ti-a {hé+a(m)+Ø}

それが銀であろうと、大麦であろうと — PN(のところ)からは受け取らなかったこと ...

(NSGU 208:26-28 Ur III)

省略された否定の定コピュラは、これまで否定の前接コピュラとして説明され、先行する頭名詞に連結して saġ-nu 《彼は奴隷ではない》と翻字されてきました (たとえばシュタインケラー [18] p.30、エツツァルト [8] § 12.11.2.1)。ただしこの文法書や、たとえばコピュラを nu < nu-um と導出するパウアー [3](p.95)はこの立場を取りません。またコピュラの /m/ は他の文脈でも削除されることがあります。たとえば árad lú-še lugal-zu-ù 《奴隷よ、あの男がお前の王か?》(ギルガメシュとアッガ 91行 OB) にこの可能性があります。

名詞化 (関係節化) 小辞-a を接尾辞として後接させて形成されるコピュラの従属節は、「とはいえ、たどえそうだとしたも」といった概念を伝えるためによく使われます。この場合には、すべての形で語幹の異形態 /me/ が現れます。他に動詞接頭辞がない場合には中立的な母音接頭辞 i- を用いて定形にすることがよくあります。

vocalic prefix

á nun ġal zâ-še-ni-šê húl-la i-me-en-na-ke₄-eš

なぜなら私は大きな力を示す者だったから、彼の力強いふともを喜んだから

(シュルギ A 27行 OB) (<nam> ...-a-ak-eš が省略されている)

{i+me+(e)n+a+ak+eš}

ur-saġ ug₅-ga i-me-ša-ke₄-éš {i+me+(e)š+a+ak+eš}

彼らは殺された英雄だったから

(グデアの円筒碑文 A 27:15)

lú igi-na sukkal nu-me-a {nu+me+∅+a}

彼の前にいた人は、大臣ではなかったが

(イナンナの冥界下り 291 行 OB)

kur-gal ^den-líl-da nu-me-a

偉大な山、エンリルなしで

(エンリル讃歌 A 109 行 OB)

ûġ-bi šika ku₅-da nu-me-a bar-ba ba-e-si

その人々は、割れた陶片でもないのに町外れを埋め尽くしている

(ウルの挽歌 211 行 OB) (-e は-a を参照している)

é-ki saġa e-me-a {i+me+∅+a}

エキは、かつては寺院の管守であったのだが

(CT 50, 26 3:5-6 OS ラガシュの母音調和がみられる⁵⁾)

時折、変わった形の定コピュラに出会うことがあります。たとえば定コピュラの語幹に前接コピュラが付加されて活用された形があります。

5) 訳注: シュメール語には、時代や方言によって母音調和が見られ、狭母音 {i, u} vs 広母音 {e, a} の対立があります。この例文では、動詞の母音接頭辞が i- ではなく、後ろのコピュラ me- の影響で e- で現れています。

pi-lu₅-da u₄-bi-ta e-me-am₆ {i+me+am+∅}

それはかつてからの慣習だった

(Ukg 4 7:26-28 OS e-me-a という変異もある)

sug hé-me-àm

本当に沼のようになっていた

(ウルナンマ 27 1:10 Ur III)

¹PN dumu PN₂ gudu₄ — nu-mu-kuš i-me-àm — PN₃ dumu PN₄

gudu₄-ke₄ ba-an-tuk

グドゥ神官 PN₂ の娘 PN は未亡人であったが — グドゥ神官 PN₄ の息子 PN₃ と結婚した

(NSGU 6:2-4 Ur III)

šeš-ġu₁₀ ^dnin-ġír-su ga-nam-me-àm {gana+me+(a)m+∅}

やあ、あれはほんとうに私の弟のニンギルスだ！

(グデア円筒碑文 A 5:17 Ur III)(ga-na はここでは接頭辞として使われている感嘆詞)

šu al-la nu-û-da-me-a-aš {nu+n+da+me+∅+a+šè}

(役人の) アラの手は彼に (関わっては) いなかったので

(NSGU 43:4 Ur III)(ここでのコピュラは完全に規則的な定形動詞として解釈される)

定動詞としての前接辞 nu-

通常は動詞の形を否定にする前接辞である nu- 《～ない》は、コピュラまたは存在の意味合いを持つ定動詞の語根として使われることもあります。最小限の動詞接頭辞をもつ、主に定形を作るための構文で多くみられます。一般的には V+nu+∅ > in-nu 《なかつた》で、OB の対訳文法テキストの項目 in-nu=*ú-la* 《なかつた》(MSL 4, 164:1) と比較されます。ETCSL やトムセン [20]§364 で i- 以外の接頭辞を持つ他の例も参照してください。

lú-še lugal-ĝu₁₀ in-nu. lú-še lugal-ĝu₁₀ hé-me-a

あそこにいるのは我が王ではない。あの男が我が王だったら……

(ギルガメシュとアツガ 70-71 行 OB)

kur dilmun^{ki} [(...)] x in-nu

ディルムンの地は……存在しない

(エンメルカルとアラッタの王 12 行 OB)

kù ad-da i-nu

もしそこにアダの(アダの所有する)銀がなければ

(OSP 2, 47 rev. 2 OAkk)

覚えていて

コピュラは、 $X=Y$ という名詞文の両側を連結する。

コピュラはまた、強調や比較、挿入句を示すこともある。

基礎的な自動詞主語のパラダイムは-(e)n, -(e)n, -∅, -(e)nden, -(e)nzen, -(e)š. である。

第 8 課 副詞と数詞

副詞 (§84-89)

様態の副詞

adverbsofmanner

英語の “fast” や “well” のような単一の副詞はシュメール語ではかなりまれなものです。副詞の機能を持つ裸の形容詞の（動詞の）語根はごく限られていて、わずかに mah 《高く》、gal 《大いに》、tur 《小さく》、hul 《邪悪に》などが挙げられるのみです。これらの無標識副詞¹⁾はクレヒヤー [13](p.74) やアッティンガー [2](§105d) が列挙しています。それ以外の場合、シュメール語は主に格標識で終わる副詞表現によって副詞的な概念を表します。副詞の表現として最も一般的なのは、裸の形容詞の語根、または動詞の語根、もしくは名詞化（関係節化）接尾辞-a を持つ動詞の語根、これらのいずれかに次に示す格を付加してつくられる短い句です。

(a) 位置・終止格 -e 《～に》

フォック [11](p.351 n.735 “avec sens adverbial. 副詞の意味を伴って”) を参照。最終課で取り上げる不定詞を伴う-e の規則的な用法

1) 訳注: 副詞であることを示す標識を持たない副詞

と、-e がしばしば前の母音によって省音することにも注意してください。
elide

húl-la-e 幸せに < húl 《幸せである》

húl-húl-e とても幸せに < húl

(b) 終止格 -šè または -ěš/eš/aš/iš 《〜へ》

アッティンガー [2](§105) は現在ではこれを「副詞格」標識 adverbialive eš(e) と呼び、終止格標識/še/とは区別しています。

gal-le-eš 大いに < gal 《大きな、偉大な》

sud-rá-šè 離れて < sudr 《離れる、遠くの》

ul-šè 永遠に < ul 《昔の》

(c) -bi-šè という組み合わせ（三人称単数代名詞+終止格）

gal-bi-šè 大いに < gal 《大きな、偉大な》

těš-bi-šè 共に < těš 《それぞれ、単独の》

(d) -bi

この語末音は-bi-šè の短縮形の場合もありますが、このBIは-béと読むほうが妥当でしょう。つまり-bi接尾辞に位置・終止格の標識-eを加えて終止格のかわりに副詞的な力を持たせたものです。

bíl-la-bé	熱中して	< bíl 《熱い》
búr-ra-bé	開いて	< búr 《緩める》
diri-bé	優れて	< diri(g) 《上回る》
gibil-bé	新たに	< gibil 《新しい》
húl-la-bé	幸せに	< húl 《幸せである》
lipiš-bé	怒って	< lipiš 《怒り》
téš-bé	全てに	< téš 《ひとつの》
ul ₄ -la-bé	迅速に	< ul ₄ 《急ぐ》

この接尾辞-bi は、三人称単数の非人称所有代名詞-bi がやや婉曲的に直示的な意味で用いられているにすぎません。このことは、ややまれではあるものの他の所有代名詞が副詞表現に使われる例も見受けられることから示唆されます。

たとえば

dili-né	彼一人で、彼自身によって	
dili-bé	それらだけで	
dili-zu-šè	あなた自身によって	
diri-zu-šè	あなた以上に	
silim-ma-né	彼は元気に	{silim+a+(a)ni+e}
min-na-ne-ne	彼らのうち二人、彼らの両方	{min+(a)nene+e}
min-na-bé	それらの両方	
húl-la-né/na	彼は喜んで、彼は楽しく (ユホン [22], p86)	

時間的、因果的、局所的な副詞表現 (§184; 101; 205)

空間格後置詞（位格 -a 《で》、奪格 -ta 《から》、終止格 -šè 《へ》、位置・終止格 -e 《～のそばに、～において》）で終わる通常の名詞連鎖、-bi 接尾辞はより直示的な意味合いが強くなり、他の所有代名詞も用いられるようになります。

よく見られる例は以下のとおりです。

ġi ₆ -a	その夜(のうち)に	
iti-da	月のうちに、月ごとに	{itid+a}
u ₄ -ba	その日に、そのときに、それから	{ud+bi+a}
u ₄ -bi-ta	その日から、その後	
u ₄ -da	その日、今日、いつ、もし	{ud+a}
u ₄ -dè	日ごとに	{ud+e}
bar-zu-šè	あなたのせいで、あなたのために	
mu-bi-šè	そのせいで、それのかわりに、それについて	
nam-bi-šè	そのために、その際に	
igi-na	彼の前で	
igi-bé	その前で	
igi-šè	(位置的に) その前へ、(時間的に) その前に	
gaba-bi-šè	向き合って、反対側で、立ち向かって	

eger-bé (位置的に) その後ろで、(時間的に) その^{あと}後で

eger-bi-ta それ以来、その後

eger-(r)a その後

ki-a ここで

ki-ba ここで

ki-bi-šè あそこで

ki-ta そこから

ki-ġá わたしのところで、わたしと

šâ-ba その中ほどで、その中で

šâ-bi-ta その外で、そこから

ugu-ba その上で

zâ-ba その^{きわ}際で、そのそばで

同じように形成される **副詞従属節** については第15課「関係節」を参照し、**独立従属接続詞** の tukum-bi 《もし》、en-na 《まで》に注意してください。

疑問表現

a-na-šè 《なぜ》などの疑問代名詞に基づく副詞表現のリストは第5課「代名詞と指示詞」にあります。

副詞文

トムセンのいうところの法の副詞(§149)について、その由来は明らかになっていません。これらは独立の語として覚えてください。

i-ne-éš いま (e-ne-éš とも)

a-da-al/lam いま

i-gi₄-in-zu まるで

アルスター ([1] p.122) はこれを*i-gi(n)-zu 《(これを) 確実に知っている!》と解しています。

数詞 (§139-142)

基数詞

cardinal number

1	aš, diš, (dili)	
2	min, mīn	
3	eš ₅	
4	limmu, límmu	
5	ía	
6	āš	
7	inim, umun ₅	
8	ussu	
9	ilimmu	
10	u	
60	ḡeš(d)	表記は DIŠ
600	ḡeš(d)u または ḡeš'u	表記は U+DIŠ 古シュメール語では DIŠ×U
3600	šár	
36000	šár'u	表記は ŠÁR _x (U×KASKAL)

序数詞

ordinal number

序数詞は u_4 2-kam 《2日目》のように属格/ak/の後にコピュラ/am/を伴って形成されます。この構文は2つ目の属格/ak/と、多くの場合、続いて位格の -a を加えて拡張することもできます。

2-kam-ma	2つ目の（もの）
2-kam-ma-ka	2度目に
u_4 2-kam-ma-ka	2日目に

エブラのテキストから得られた重要なデータや、他の数詞の構文についての議論も含めた、数詞に関する明確で最新の記述がエッツアルト [8](pp61-67) にありますので参照してください。

数の表現

基数詞を所有代名詞や格標識と組み合わせて副詞表現を示すことができます。

aš-a-né, aša-né	ひとりで、彼自身で	{aš+(a)ni+e}
min-na-ne-ne	彼らふたりで	{min+(a)nene+∅}
dili-bé, dili-bi-šē	ひとつで、それ自身で、 それら自身で	

特に行政文書では、didli(DILI.DILI) 《いくつかの、様々な、雑多な》や hi-a 《混ざった、いろな種類からなる》といった形容詞で名詞を修飾することがよく見られます。

lú didli-ne 幾人かの男たち
 lú-igi-nígin didli 様々な検査員達
 anše-hi-a (違った性別や月齢の) 種々雑多のロバ達

掛け算は、a-rá 《～回》という用語で示されます。

mu ^dnanna kar-zi-da a-rá 2-kam-aš é-a-na ba-an-ku₄ {2+ak+am+šè}

正しい波止場(個人名)のナンナが2度目に彼の神殿に入った年
 シュルギ王 36 年 (ウル第三王朝) を表す文言 (-n-は-a を受けている)

覚えていて

副詞は-e、-eš、-šè、-bé、-bi-šè といった格標識で終わる
 短い名詞連鎖であることが多い。

第9課 副詞の格

絶対格 -Ø (§38-42; 169)

絶対格は 無標 ^{unmarked} の一より理論的に言うならゼロ形態素-Øで標識される一格で、文の自動詞主語または被動者(動詞を説明する課で定義します) _{subject} _{patient} を表します。

能格と位置・終止格 -e (§170-174)

トムセンが述べるように、人によっては後置詞-eを「それらの関係が必ずしも明確でない二つの機能を持つ格」 (§170) とみなすこともあるかもしれませんが。シュタイナーも能格と接格は形態的には同じだが、機能的には区別される ([17] p.145 n.39) と述べています。またカニングムは「能格標識はさらなる文法化 ^{grammaticalization} として分析することができ、『~と接して』という意味を持つこの方向格(位置・終止格とも) _{directive} が語彙的に漂白されて、他動詞の主語を示すというより抽象的な機能を果たすようになったものである」 ([7]p.47) と述べています。ヤーゲルスマも能格について「方向格標識とは、ただ同形異義語 ^{homonymous} であるだけでなくむしろ同語源語 _{cognate} といえる」 ([12] §7.3) と述べています。どう表現するにしろ、この文法書も本質的には同じ立場をとります。これらの根底にある(あるいは歴史的な)同一性が理解されてははじめ

て、能格と位置・終止格を二つの別の格であるかのように語ることができるのです。二つの全く異なる機能を持つ格である 奪格・具格 ablative-instrumental の場合 (後述) と比較してください。多くの研究者は、たとえ過去のある時期に一つの格から分かれたのだとしても、この二つの格を同音の異なる格として扱うことを好んできました。

能格標識としての-e は、動詞の出来事の行為者または原因者である 動作主 agent を指し、「誰によって」あるいは「何によって」その出来事が起こるのかを表します。古い文献では動作主格と呼ばれていましたが、現在の研究者はこの格を能格と呼んでいます。主語と目的語を区別する標識体系について私達の身近な印欧語の基本となる 主格 / 対格 nominative / accusative に対して、シュメール語のような言語を 能格 / 絶対格 ergative / absolutive とする慣例に従っていることによります。

位置・終止格標識としての-e は、その出来事が起こる場所や対象を《～のそばで、～のとなりに、～で》または《～の上で、～の上に、～を越えて》のように示します。非常に幅の広い意味を持つので、ときには位置・終止格をまず《～に関して》と訳しておき、それから文脈の助けを借りて方向や位置の概念をより明らかにしようと試みるのもよいでしょう。この格を向格 (初期のヤコブセン)、接格 (シュタイナー、後期のヤコブセン、アッティンガー)、方向格 (エッツァルト、クレヒャー、ヤーゲルスマ、ゾヨミ) と呼ぶ研究者もいます。向格《～に、～へ》、接格《～の近くに、～で、～のそばで》、位格《～で》、終止格《～の方へ、～まで》のそれぞれの格の機能を兼ね備えているこの格について、意味の範囲を限定しないよう、ここではあまり具体的でも伝統的でもない位置・終止格の用語を使用することとしましょう。

位置・終止格にはさらに特殊な用法もいくつかあります。最も重要

なのは、非人称名詞が与格目的語になるときに与格の代わりに標示する用法です。lugal-ra 《王に》^{dativ}に対して é-e 《家に》となるわけです。逆に使役文において第二の人称動作主を示す場合には能格の代わりに与格が用いられます。このように与格の支配と能格／位置・終止格のそれとの間には密接な統語的結びつきがあり、近年ようやくその意味が理解されつつあります。^{rection}

位置・終止格は、後述する終止格-šé と同様に、副詞的な表現を形成するためにもよく使われます。たとえば húl-la-e 《幸せに》、téš-e 《みんなで、一つになって》、u₄-dè 《その日のうちに》、ul₄-ul₄-la-e 《急いで》、ur₅-re 《こんな風に、こうして》のようです。

位置・終止格は通常はいわゆる不定詞に現れる格で、不定詞を一種の間接目的語として文の主動詞に結びつけたり、より一般的な副詞節を作る役割を果たします。例は第 20 課「分詞と不定詞」を参照してください。位置・終止格は弱い指示詞や決定要素の一種として働きます。この用法はおそらく近称指示詞の-e と関連しているのでしょう。第 5 課「代名詞と指示詞」を参照してください。ラテン語でいうところの casus pendens(吊格¹⁾、動詞と直接的な統語関係のない格)の-e か、呼格接尾辞の-e としても説明される機能で、この標識は後の指定を先取りしたり、lugal-e 《王に関して、王については、例の王は》のように標識された名詞や代名詞を主題化させたりあるいは注目させたりする役割を果たします。たとえば ^den-ki-ke₄ ki-tuš ki ág-gā-ni mu-na-dù 《そしてエンキ神については、私は彼に彼の愛する住居を建てた》(RIME 4.02.08.05:11-12) とあります。詳しくはアッティンガー ([2] §112a) とウッズ ([21] p.323) を参照して

1) 訳注：原著では hanging case。日本語の訳語が見つからなかったので仮に吊格としています。

ください。

位置・終止格は分配句、特に奪格・具格の後置詞-taと共起して現れます。例： $\dot{g}uruš-e$ 10 $sīla-ta$ 《労働者ごとに10クォートずつ（の配給）》 また、まれながら終止格（後述）のように非人称名詞との比較における二番目の要素を表すのに用いられる場合もあります（人称名詞や代名詞の場合は人称与格がこの機能を果たします）。例： $\acute{e}-bi$ $\acute{e}-gal$ $lugal-a-ke_4$ $gal-\grave{a}m$ 《その寺院は王の宮殿よりも大きい（王の宮殿に関して大きい）》

-eは母音、とくに別の/e/が先行する場合には文字では現れない場合が多いです。ただし、とくに古い音韻規則が一貫して守られなくなった後期のテキストでは、例外も珍しいものではありません。先行する/a/の後では-aとして現れ、また/u/の後では-ù（または- u_8 ）として現れることがあります。とくに前者はウル第三王朝期以前に、後者は古バビロニア期に $lú+e > lú-ù$ 《男が》 のように見られます。トムセンの議論と §172 の例を参照してください。-eは他の母音のあとで完全に消失するのではなく、その前の母音と同化し、発話においては母音の長音化として現れるものと推測されますが、長音化は文字では示されないのが普通です。不定詞{ $dù+e+d+e$ } 《建てる》を表す表記が古バビロニア期では $dù-ù-dē$ 、古シュメール期では $dù-dē$ となる現象と比べてみてください。

トムセンらとは異なり、本書では{(a)ni+e}と{bi+e}、つまり三人称単数の所有代名詞と隠れた位置・終止格との組み合わせを-(a-)ni、-biではなく-(a-)né、-béと表記することとします。同様に複数形の場合も{(a)ni+ene}と{bi+ene}を-(a-)né-ne、-bé-neと表記します。

与格 -ra (§175-179)

与格は人称名詞または代名詞だけに用いられる格です。与格の目的語を取る動詞と共に非人称の目的語が出現する場合は、代わりに位置・終止格-eがつけられます。ただしこの規則は絶対的なものではなく、少なくとも人称名詞の場合にも-raの代わりに-eがつくことがあります。例：ir₁₁ géme ù dumu-níta dumu-munus-ni a-na-ha-né-e ba-na-gi-in 《奴隸、奴隸の女、その息子と娘はアナハニに（属すると）認定された》(RTC 290:11-12 Ur III). -eと-raについては、羊の特性（たとえば ASJ 4, 132:5）と職業名というウル第三王朝期の一般的な行政表現でその対立を示すことができます。

gud-e ús-sa 雄牛に従う（羊）

lugal-ra ús-sa 王に従う（人間）

与格の通常の引用形は-raで、子音（脱落しやすい語末音や属格の-akを含みます。それらが見ために表記されていない場合でもです）の後に付く形です。母音に続く場合、特に所有接尾辞の後では-Vrとしてのみ現れることもあります。ウル第三王朝期前半より前の時代のテキストでは、-Vrは母音の後で省略されることが多く、前サルゴン期（古シュメール期）のテキストでは、少なくとも文字上では常に省略されます。この場合、与格の存在は動詞連鎖内の与格空格接頭辞によって正書法的に示されます。例えば次の二つの前サルゴン期ラガシュの文章（それぞれ VAT 4718 と DP 425 より）を比べてみてください。

en-ig-gal nu-bànda ú-ú ugula e-na-šid

監督 E は親方 U に勘定をつけた。

{nubanda+e} {ugula+ra}

en-ig-gal nu-bànda ú-ú agrig-ra e-na-šid

監督 E は親方 U に勘定をつけた。 {agrig+ra}

古シュメール期の脱落しやすい子音に続く -ra の例は DP59 rev.7 にあります。

maš-da-ri-a en-èn-tar-zi-ra mu-na-de₆

税金はエネンタルジ (王) に納められた。 {en+entar+zi(d)+ra}

後期になると古い音韻規則は廃れ、-ra があらゆる文脈で使われるようになりました。したがって {lugal+ra} 《王のために》という句や {dumu lugal+ak+ra} 《王の息子のために》という句は常に lugal-ra や dumu lugal-la-ra と書かれ、{lugal+ani+ra} 《彼の王のために》はその時代の規則 (あるいは書記官の習慣) に応じて lugal-la-ni、lugal-la-ni-ir、または lugal-la-ni-ra と書かれました。

与格のおそらく最も一般的な用法はいわゆる ^{ethical} 心性的な、あるいは ^{benefactive} 受益者の与格といえる「誰かのために」何かをするというもので、この意味ではほとんどの動詞で現れるといえますが、次のような贈与の動詞では特によく用いられます。

šúm 与える

ba 分配する、割り当てる、贈る

ただし与格はある種の動詞では (人称名詞や代名詞にのみ伴って) 方向や場所の概念を伝えるために使われることがあります。その動詞の例は次のようなものです。

動きの方向	du/ġen	～に行く（未完了形/完了形の語幹）
	ku ₄ (r)	～に入る
	te(ġ)	～に上る、近づく
	gurum	～に曲がる (bow to)
前方の位置	ġál	そこにいる、～の前方にいる
	ġál	～の前に立つ
感情	sa ₆	～にとって良い、～を楽しませる
	giġ	～にとって痛い、～を傷つける
	ki(g) áġ	愛する（文字通りには「愛を計り与える」となる複合

非人称名詞での位置・終止格と同様に、人称名詞の与格-ra は人称名詞や代名詞を比較する際の二つめの部分を示すこともあります。

diġir ir₉-ra diġir-re-e-ne-er rib-ba {diġir+ene+ra}
 (すべての) 神々よりも傑出する強大な神
 (イッビ・スエン B A 38 OB)

^dA-nun-na-ke₄-ne za-e šu-mu-un-ne-íl-en {^danuna(-k)+ene+ra}
 こうしてあなたはアヌナ諸神よりも高く引き上げられた
 (イシュメ・ダガン X 18 OB)

lú-ne-er an-diri=*eli annîm rabi*
 彼はこれよりも偉大である

2) 訳注: 一般的には、文字通りには土地 (ki) を測る (áġ) とされることが多く、ここでフォクスヴォグが ki(g) としている語についてはよくわかりません。なお ePDS2 には OB 時代の異綴として ki-ig áġ も掲載されており、ここに語末音 g を見出すことができるのかもかもしれません。(http://oracc.org/epsd2/o0031835)

(OBGT I 332、古バビロニア期の文法テキスト) -nは-ra を受けている

時折、特にウル第三王朝期のテキストでは-ra が**人称の斜格標識**の典型として、次の法律文書の一節で見られるように他の後置詞obliqueに取って代わることがあります。

1 2/3 ma-na 1/2 gín kù-babbar PN-e PN₂-ra in-da-tuku-a-ke₄-eš
 なぜなら PN は PN₂ に対して銀 1 と 2/3 ミナ 1/2 シェケル³⁾ (の負債) を持っていたからである。

NSGU 117:2-5 (ウル第三王朝期) (ここで-ra は予測される共格 da に取って代わっている)

なお、与格は第二の(具格の)動作主を指すこともあります。(第14課「中核接頭辞：能格、位置・終止格、位格」の「中核接頭辞の構文と機能」)

位格 -a (§180-186)

位格後置詞の-a は一般的には「～の中で」という意味を持ちますが、文脈に応じて「～の中に、～の上で、～の間で」のように訳してかまいません。時間的には「～(ある日)に」や「～(あるとき)に／の間に」といった意味にもなります。たとえば{u₄+bi+a} > u₄-ba 《その日に、その時に》や uzud gúrum-ma šid-da 《検査(の時間)の

3) 訳注：ミナ、シェケルはヘブライ語の衡量ですが、いずれもシュメール時代まで遡る単位です。ミナはアッカド語の *manû*、シュメール語の *mana* から来ています。シェケルはアッカド語の *šiqḷu*、シュメール語の *gín* にあたります。*gín* は 1/60 単位を意味します。

間に勘定されたヤギ》のようにです。位格の-aは不変母音です。属格の-akでの/a/とは違って、先行する母音によって省略されることはないようです（ただし名詞化の-aに位格の-aが続く場合には後の動詞形では単一の/a/で表されます）。この事実から、現在の研究者のいくらかは位格は実際には何らかの子音（おそらく声門閉鎖音 /ʔa/ ^{glottalstop}を持っており、それが先行する母音への省音 ^{elision}をさまたげていると考えています。（クレヒャー、ヤーゲルスマ [12]）

-aはまた「材料の場所」を示す機能を持っていて、そのものがどこで、あるいは何から作られたかを表すことができます。

é kù-ga i-ni-in-dù ^{na}za-gìn-na i-ni-in-gùn {kù(g)+a,
zagin+a}

彼は銀で神殿を建て、ラピスラズリで彩った。

エンキの旅 7行目 OB (-ni-は-aを受ける)

gêštu-ġu₁₀ níġ galam-ma sù-ga-àm {galam+a}

私の心は賢いことでいっぱいだ。

シュルギ讃歌 B 54 行目

ウル第三王朝期のテキストや人名では位格の-aが与格の-raの代わりに用いられることがあります。たとえば ^dnanna-a in-da₅-kúr-a 《ナンナに敵対する者》(RIME 3/2.1.1.28 p.20、トムセン [20] §181、リメ [15] p.87 注記 1、シュタインケラーの売買文書 P.15 を参照)

さらに終止格や位置・終止格と同様に、-aは比較の二つ目の部分を標示することもあります。

me-bi me gal-gal me-me-a diri-ga {diri(g)+a}

その神の力は非常に強大なメーで、あらゆるメーを凌駕する。
グデアの円筒碑文 A ix 12 行目 UrIII

èš nibru^{ki} èš abzu-a ab-diri ニップルの神殿：その神殿はアブ
スを凌ぐ^{しの}
イシュメ・ダガン C 1 行目 OB (-b-は-a を受ける)

共格 -da (§188-194)

共格の後置詞-daは文法化と呼ばれる言語学的過程を経て
名詞da《側》から派生したものと考えられています。「一緒に、共に、
横に、ならんで」といった汎用的な意味あいを持っていて、さまざま
な種類の動詞といっしょに使われます。また次に示すような間接目的
語を標示することもよくあります。

相互的または互恵的な活動を表す動詞

sá	匹敵する、肩を並べる、対抗する
du ₁₄ mú	けんかを売る (文字通りには「～にいさかいをかりたてる」)
a-da-man du ₁₁	競争する、論争する (文字通りには「～との論争を行う」)
gú lá	抱きしめる (文字通りには「～と首を吊るす」)

感情を表す動詞

húl	～と幸せになる、喜ばせる
saġ-ki gíd	～に難色を示す (文字通りには「～で額を引っ張る」)
ní te/tuku	～を怖がる、恐れる
su zi	～に鳥肌が立つ (ほど恐れる)

共格は単純な接続を表すこともできます。接尾辞-bi との組み合わせで名詞句の二つの名詞を繋ぐことが多いため、接続詞-bi-da と呼ぶ人もいます。(一方、自立した接続詞 \dot{u} 《と》はアッカド語からの借用語で、節を繋ぐためにも使われます。) -bi-da はしばしば-bi に短縮されるため、-bi は接続詞「と」を意味する場合もあれば「あれ」(指示代名詞) や「その、それらの」(所有代名詞) を表す場合もあることに留意しておかねばなりません。

接続詞の (-bi)-da の例です。

lú lú-da	男と (with) 男	=	男たちの両方とも
áb amar-bi-da	雌牛と (with) その仔牛	=	雌牛と (and) 仔牛
nita munus-bi	男と (with) 女	=	男と (and) 女

maš-da-ri-a ki-a-naġ en-èn-tar-zi du-du saġa-bi-da-kam 《管理者エネンタルジとドゥドゥの両方の祭壇のためのマシュダリア税である》(Nik I 195 1:4- 2:3 OS) で、属格の-ak の前に-bi-da が位置しているところに注目してください。なお古シュメール語では-bi-da の異綴として-bi-ta があり、たとえば šu-niġin 158 udu sila₄-bi-ta 《全部で 158 頭の羊と仔羊》(VAT 4444 2:3) があります。

これは-da を-dā と表記する正書法上の異綴か、あるいは発音の変異であるのか、または具格の後置詞-ta が共格的な力で変則的に使われている可能性が考えられます。

シュメール語での共格は能力を表す機能、すなわち「できる」という概念を表す唯一の方法でもあります。これは動詞と共格・空間格接中辞の組み合わせによってのみ示されます。古バビロニア語と新バビロニア語の文法テキストにおける対訳パラダイムについてはCADの *le'û* (L 巻 p.152) 語彙の節を参照してください。

é in-da-an-dù 家を彼 (自身) と建てた = 彼は家を建てることのできた

奪格・具格-ta (§203-212)

その名の通り、**奪格・具格**の後置詞-ta には二つの異なる機能があります。その基本的な機能は「空間や時間におけるへだたりや分離」です。空間的には「(ある場所から) 離れて」「(ある領域や容器から) 出て」を意味します。時間的な意味では副詞句や**従属節**で、特に u_4 《日、時》と共に使われることで《そのとき、その時以来、その後》を表します。

u_4 -bi-ta その日から、それ以来、その後
 u_4 é ba-dù-a-ta 神殿が建てられたその日から

特定の紋切り型の表現では、sahar-ta tuš 《塵の中に座り込む》のように位格が奪格に置き換わる傾向があります。また diġir-e é-mah-a-ni-ta nam in-tar 《神は崇高な神殿 (の中) から運命を定

めた》のように話し手から離れた場所で起こる動作を表現する場合にもよく用いられ、シヴィルはこの用法を「遠隔直示の位格⁴⁾」と呼んでいます ([5] p.63)。

具格^{instrumental}の用法の-taは、「斧で切る」「水で満たす」のように「～で、～を使って」という意味を持ちます。また次の例のように感情の状態を表す副詞的にも用いられます。

lipiš-ta	怒りで	>	怒って
šā-ga-ni-ta	彼の心で	>	すすんで、快く
šā-húl-a-ni-ta	彼の幸せな心で	>	幸せに

多くの場合、-taが位格の意味で使われているのか具格の意味で使われているのかを判断するのは難しいものです。次の例をみてください。

1 sila₄-ga ne-mur-ta ba-šeġ₆

一頭の仔羊を熱い熾火で焼いた。

(BIN 3, 74:1-2 Ur III)

(45頭の羊と山羊が) gir₄-ta ba-šeġ₆

(45頭の羊と山羊が) オープンで (を使って?) 焼かれた。

(Kang, SACT I 171:1-4 Ur III)

上記2例ともシュタインケラー [19] より

4) 訳注: 原著は“location of remote deixis”と書いていますが、シヴィルの著書では正しくは“locative of remote deixis”[5]または“locative with remote deixis”[6]です。

終止格 -šè (§195-202)

終止格の通常の引用形は-šèです。ただし、記号 ŠÈ には éš という音価terminativeもあります。終止格が子音に先行する場合は/eš/、母音に先行する場合には/š/または/še/と発音されたことを示す証拠が見つっています。gal-le-eš と gal-bi-šè 《偉大に》、あるいは saġ-biš に対応する saġ-bi-šè 《その前／上に》のような綴りを比べてみてください。ヤーゲルスマ^[12]は終止格のついた人名 lú-niġ-lagar-e-eš を挙げています (FAOS 17, 96: 3-5)。トムセンは終止格の基本的な引用形として/eše/という混成形を導入することでこれを説明しました。é-me-eš-e ġe₂₆-nu 《私達の家においでなさい!》(イナナとドウムジ Y 33 行)を{é+me+(e)še}と分析するわけです。(アッティンガーが伝統的な終止格の二つの形態素(関連はするものの機能的に異なる)にわけたことについてはすぐ後で述べます。)学者たちは通常、この音韻の変異を厳密に扱おうとせず、便宜上ほとんどの環境で記号 ŠÈ を šè と読むことにしています。所有接尾辞をともなう終止格については第5課の「人称代名詞の形のまとめ」を参照してください。

終止格の一般的な意味はある場所は目標「へ／までの動き」というものです。運動や動作の動詞だけでなく、「～を見る」「～に耳を傾ける」「～に注目する」といった知覚や意識の動詞にも使われます。

en-en-né-ne-šè hal-ha-dam

(先祖代々の)すべての領主に分配されるべきものである。

(DP 222 r. 5:1'-2' OS)

ka-ta è-a lugal-ġá-šè ġizzal_x hé-em-ši-ak

私は私の主人の口から発せられた言葉に注意を払った。

(イシュメ・ダガン A 135 OB)

igi-zi mu-un-ši-in-bar-re-eš sipa ^dur-^damma-ra

彼らは正しい目を彼へ向けた。羊飼うルナンマへと。

(ウルナンマ B 36 Ur III)

ここでは-šèの代わりに人称与格の後置詞-raが使われていますが、動詞が必要とする終止格は接頭辞-n-šiに保持されています。

DN-ra nam-ti PN-a-šè a mu-na-šè-ru

彼は（奉納物を）PNの命のためにDN神に捧げた。⁵⁾

(古シュメール期の一般的な奉納の文句)

終止格の重要な二つ目の用法は、gal-le-eš《大いに、非常に、良く》、u₄ dè-eš《日のように》、u₄-ul-la-šè《はるか遠い日に、永遠に》といった副詞表現を形成することです。アッティンガー ([2], pp.168-70; 254-5)はこの副詞形成機能を彼が「/eš(e)/の発音を持つ副詞格」と呼ぶ新たな形態素に割り当て、/še/の発音を持つ終止格と区別しています。シュタイブル^[16](FAOS 9/2 129)も参照してください。彼はこの機能を終止・副詞格と呼んでいます。この用語はアッカド語で副詞を形成する終止・副詞格接尾辞-*iš*（たとえば *rabiš*《偉大に、壮大に》）を思い起こさせます。この機能における終止格は、同義表現の *téš-e*/*téš-bé*/*téš-bi-šè*《一緒に、ひとつになって》のように位置・終止格とともにかなり自由に変化します。次の二つの

5) 訳注: PNは個人名 (personal name)、DNは神名 (divine name) です。

並行表現を比べてみてください。

igi-bi-šè é ba-sa₁₀

彼ら（証人たち）の前で、家は買われた。

(シュタインケラー売買文書 No. 73:18 Ur III)

igi-bé saĝ ba-šúm

彼ら（証人たち）の前で、奴隷は引き渡された。

(同 No. 68:17)

ĝiš UR.UR-šè e-da-lá

{Vn+da+n+lá+Ø}

彼は彼と一対一で戦った。

(エンテメナ 28, 3:10 OS)

ĝiš UR.UR-e e-da-lá

彼は彼と一対一で戦った。

(エアンナトゥム 1, 9:1 OS)

おそらくこの副詞格的機能と関連しているのが、終止格の「～として、～の役割、地位において」といった用法でしょう。次のようなものです。

ur-^dma-mi maškim-šè in-da-an-gi₄

彼は彼とともにウル・マミを監督官として送り返した。

(NSGU 121:5 Ur III)

^dšu-^dsuen ki-âĝ ^dnanna lugal ^den-líl-le šà-ga-na in-pà
sipa kalam-ma ù an ub-da límmu-ba-šè

ナンナに愛され、エンリルが彼の心に選んだ王、シュ・シン。
 四方世界の、そして国の羊飼いとしての。(NSGU 121:5 Ur III)

終止格は位置・終止格と同様に、比較の第二の要素を表すことができます。é-gal-la ni é-zu-šè mah-àm 《彼の宮殿はあなたの神殿より大きい》のようにです。diri-zu-šè 《あなたよりも》(書簡集 B 5:6 OB) という表現についても比べてみましょう。終止格の他の用例や別の特殊な用法については、トムセン §198-200 を参照してください。

複合動詞と、動詞補部の標準支配

前述のように、シュメール語の動詞の多くは通常、特に副詞格に立つ補部complement（間接目的語）と結びついているか、あるいはそれを必要とします。複合動詞compound verbと呼ばれるものでは特に当てはまります。複合動詞は特定の被動者名詞patient（目的語）が動詞の語根と一緒に使われて、私たちに馴染みのある西洋の言語ではしばしば一語で表されるような概念を表現するものです。たとえば ki(g) - áĝ 《愛を計る = 愛する》という複合動詞は、愛する誰か（与格）または何か（位置・終止格）を示す間接目的語を前提にしています。トムセンの「動詞の一覧」(pp.295-323)には標準的な複合動詞を含む多くの一般的な動詞について、間接目的語を示すために使われる典型的な例が提供されていますので、シュメール語の完全な文章を分析する際には大いに役立つことでしょう。この文法書の副読本である「初級シュメール語彙集⁶⁾」にも多くの複合動詞が主要部名詞ごとに列挙されており、特定

6) 訳注: The Elementary Sumerian Glossary 2022年版がこちらから入手できます。https://cdli.mpiwg-berlin.mpg.de/articles/cdlp/3.1

42 第9課 副詞の格

の動詞でよく使われる格の後置詞を記したものもあります。

覚えています

絶対格	-Ø	自動詞主語／他動詞目的語のゼロ
能格	-e	他動詞主語
位置・終止格	-e	～で、～の上で、 ～の次に、～（物）のために
与格	-ra	～に、～（人）のために
位格	-a	～で、～の中で、～の中へ、 ～の間に
共格	-da	～とともに
奪格・具格	-ta	～から、～の外で、～によって
終止格	-šè	～へ、～まで、～のために、 ～として（副詞形成的に）

疑問があるときは、まず位置・終止格を「～に関して」と訳し、それから文脈をもちいてその意味を明らかにすること！

名詞接尾辞-bi の3つの使いかた

所有 その、それらの

指示 これ、あれ、それら

結合 ～と～ < -bi-da

付録 A 練習問題

練習問題 3 コピュラ、独立代名詞

神々

^d En-líl	エンリル神	最高位の地上の神、ニップル市の守護神
^d Inana	イナナ神	情熱と闘争の女神、ウルク市の守護神
^d Iškur	イシュクル神	雨の神、カルカル市の守護神
^d Nin-urta(-k)	ニンウルタ神	エンリル神の息子、農業と戦争の神 ギルス市の守護神
^d Šakkan	シャッカ神	野生動物の神

地名

Ennigi ^{ki}	エンニギ	冥府の治癒神ニナズの祭神の中心地
Ki-en-gi(r)	キエンギ	シュメールのこと
Úri(m) ^{ki}	ウル	月の神ナンナ Nanna(r) の祭神の中心地 (Uri ₅ (m) ^{ki} とも表記される)

1 bād sud-rá-bi bād é-gal-ĝá-kam

2 ugal nin Ki-en-gi-ra i-me-en-dè-en

3 é-bi é-ĝu₁₀ nu-um, ki-tuš kù en Úri^{ki}-ma-ka-kam

- 4 nin-ġu₁₀ ^dInana á-dah-ġu₁₀-um
(ウトゥヘガルの勝利 29 UrIII)
- 5 za-e: ^dIškur lugal-zu-um ^dŠakkan šuš-zu-um bar-rim₄ ki-nú-zu-um
(羊と穀物 171 OB)
- 6 nar za-pa-âġ-ġá-ni du₁₀-ga-àm e-ne-àm nar-àm
(ことわざ集 2+6 A 73 OB)
- 7 ^dIškur-ra á-dah-ha-ni-me-eš
(ルガルバンドとフルルム山の洞窟 401 OB)
- 8 a-ne-ne dumu Ēnigi^{ki} dumu Ūri^{ki}-ma-me-ěš
(シュルギ D 373 UrIII)
- 9 ^dEn-líl en za-e-me-en lugal za-e-me-en
(エンリルとニンリル 144 OB)
- 10 ur-saġ an-eden-na men-bi-im eden-na lugal-bi-im
(エンキと世界秩序 354 OB)
- 11 ġá-e ù za-e šeš-me-en-dè-en
(ことわざ集 8 D 2 OB)
- 12 an-na dili nun-bi-im ki-a ušumgal-bi-im
(エンリル A 100 OB)
- 13 ^dNin-urta ur-saġ ^dEn-líl-lá za-e-me-en
(ニヌルタ B 29 OB)
- 14 sá-du₁₁ kas gíg du₁₀-ga-kam
(Nik I 59 3:9 = TSA 34 3:10 OS)
- 15 me-bi kù-kù-ga-àm
(イッビ・スエン B セグメント B 11 UrIII)

練習問題 4 副詞格、副詞的表現、指示詞

次の名詞連鎖を分析し翻訳しなさい。

- | | | | |
|----|--------------------------|----|-------------------------------------|
| 1 | u ₄ -bi-ta | 24 | ul ₄ -la-bé |
| 2 | u ₄ -ba | 25 | nam-bi-šè |
| 3 | u ₄ -ul-la-ta | 26 | téš-bi-šè |
| 4 | u ₄ -ri-a | 27 | u ₄ -dè-eš |
| 5 | gù nun-ta | 28 | ní-bi-šè |
| 6 | á kal-ga-ni-ta | 29 | dili-zu-šè |
| 7 | šà-húl-la-zu-ta | 30 | an-ta ki-šè |
| 8 | šà iri-ka | 31 | ugu saĝ-ĝá-na-ke ₄ |
| 9 | šà iri-ba-ta | 32 | gú-e-ta gú-ri-šè |
| 10 | šà-bi-ta | 33 | ì-ne-éš |
| 11 | bar iri-ka | 34 | galam-šè |
| 12 | eger é-ĝá-ta | 35 | gal-le-eš |
| 13 | igi é-babbar-ra-ka | 36 | hur-saĝ an-ki-bi-da-ke ₄ |
- (羊と穀物 1 OB)

14 igi-zu-šè

37 1/6 (gur) zíz ninda

Géme-^dNanše Munus-sa₆-ga-bi

(DP 149 8:4-6 OS princesses)

15 igi-ba

16 ugu-ba

17 gú i₇-da-ke₄

18 gaba hur-saĝ-ĝá-šè

19 da é-za-ke₄

20 da-bi-šè

21 saĝ-bi-šè

22 ul-šè

23 mah-bi-šè

文献

- [1] B.Alster, Festschrift für Georg Molin zu seinem 75. Geburtstag,1983
- [2] Attinger, Pascal. *Eléments de linguistique sumérien* (1993)
- [3] Bauer, *Archiv für Orientforschung* 40/41 [1993/94]
- [4] Civil, Miguel. 1979. Ea A = Naqu, Aa A = Naqu, with Their Forerunners and Related Texts. *Materials for the Sumerian Lexicon* 14.
- [5] Civil, Miguel. “Enlil and Ninlil: The Marriage of Sud.” *Journal of the American Oriental Society* 103, no. 1 (1983): 43– 66. <https://doi.org/10.2307/601859>.
- [6] Civil, Miguel. *The Farmer’s Instructions. A Sumerian Agricultural Manual.* (Aula Orientalis Supplementa 5) Editorial AUSA: Sabadell, 1994
- [7] Cunningham, Graham. ‘Sumerian word classes reconsidered’, in Heather D. Baker et al. (eds.) *Your Praise is Sweet. A Memorial Volume for Jeremy Black from Students, Colleagues and Friends.* Oxford: Griffith Institute, 41-53.
- [8] Dietz Otto Edzard, *Sumerian Grammar Handbook of Oriental Studies. Section 1 The Near and Middle East*, BRILL, 2003
- [9] Falkenstein, Adam. 1956. *Die Neusumerischen Gerichtsurkunden / 1 : Einleitung und systematische Darstellung.* München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften : In Kommission bei Beck.
- [10] Falkenstein, Adam. 1956. *Die Neusumerischen Gerichtsurkunden / 2 : Umschrift, Übersetzung und Kommentar.* München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften : In Kommission bei Beck.
- [11] Focke, Karen. 1998. ”Die Göttin Nin-imma”. In *Zeitschrift für*

Assyriologie 88. 196-224.

- [12] Jagersma, Abraham Hendrik, A descriptive grammar of Sumerian, Faculty of the Humanities, Leiden University, 2010
- [13] Krecher, J. Morphemeless Syntax in Sumerian as Seen on the Background of Word-Composition in Chukchee, ASJ 9 (1987)
- [14] Heimpel, W. Tierbilder in der sumerischen Literatur. (Studia Pohl, series minor 2). Rome: Pontifical Biblical Institute, 1968.
- [15] Limet, H.: L'anthroponymie sumérienne dans les documents de la 3e dynastie d'Ur, Paris, 1968
- [16] Steible H. Die neusumerischen Bau- und Weihinschriften. Freiburger altorientalische Studien 9/1, 9/2. Wiesbaden – Stuttgart, 1991. 9/1: S. 246-247; 9/2: S. 86-87, Gudea Statue T.
- [17] Steiner, Gerd, 'Sumerisch und Elamisch: typologische Parallelen' , ASJ 12, 143–176., 1990
- [18] Steinkeller, P. Third-Millennium Texts in the Iraq Museum , 1992
- [19] Steinkeller, P. : "Sheep and Goat Terminology in Ur III Sources from Drehem." Bulletin on Sumerian Agriculture 8: 49–70. 1995
- [20] Marie-Louise Thomsen, The Sumerian Language: An Introduction to Its History and Grammatical Structure, Copenhagen Studies in Assyriology, Akademisk Forlag
- [21] C. Woods, Acta Sumerologica 22 , 2000
- [22] Wu, Yuhon "LI = gúb and LI = elx." NABU (Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires) 1990/3

索引

A

ablative-instrumental/奪格・具格	26, 36
ablative/奪格	18
absolutive/絶対格	26
accusative/対格	26
adessive/接格	25, 26
adverbial subordinate clause/副詞従属節	19
adverbiative/副詞格	16, 39
adverbs of manner/様態の副詞	15
agentive/動作主格	26
agent/動作主	26
allative/向格	26
allomorph/異形態	2
ammisible/脱落しやすい	29
apposition/同格	6
assimilate/同化	28
Auslaut/語末音	29

B

benefactive/受益者の	30
------------------------	----

C

cardinal number/基数詞	21
cognate/同語源語	25
comitative/共格	34
complement/補部	41
compound verb/複合動詞	41
conjunction/共起	28
conjunction/接統詞	35

D

dative/与格	27, 29
deictic/直示的	18
deictic/直示的	17
demonstrative/指示詞	27
determining element/決定要素	27
dimensional case/空間格	18
directive/方向格	25, 26
distributive phrase/分配句	28

E

elide/省音	16
elision/省音	33
enclitic copula/前接コピュラ	1
enclitic/前接語	1, 8
epenthetic vowel/挿入母音	2
ergative/能格	25, 26
ethical/心性的	30

F

- finite copula/定コピュラ 2, 8
finite verbal form/定動詞形 2

G

- glottal stop/声門閉鎖音 33
grammaticalization/文法化 25, 34

H

- helping vowel/助母音 2
hepercollect/過剰修正 3
homonimous/同形異義語 25

I

- independent subordinating conjunction/独立従属接続詞 19
infinitive/不定詞 27
instrumental/具格 37

L

- locative-terminative/位置・終止格 18
locative/位格 18

M

- modal adverb/法の副詞 20

N

- near-deixis demonstrative/近称指示詞 27
nominative/主格 26

O

- oblique/斜格 32
ordinal number/序数詞 22

P

- patient/被動者 25, 41
perticle/小辭 6
precative/嘆願法 8
predicate/述部 1
preformative/前接辭 8, 12

Q

- quasi-finite verb/准定動詞 8

R

- rection/支配 27
relativizing/關係節化 15

S

- similative/類似 6
specification/指定 27
subject/自動詞主語 25
subordinate clause/從屬節 36
syntactic/統語的 1

T

- terminative/終止格 18, 38
topicalize/主題化 27

U

unmarked/無標	25
unstressed/非強勢	1

V

variant/異綴	2
vocalic prefix/母音接頭辭	9
volative/呼格	27

シュメール語文法入門 Vol III

2024年8月24日 初版

著者 ダニエル・A・フォックスヴォグ

翻訳 ゆー (uyum)

協力 hinoya

This work is adapted from "Introduction to Sumerian Grammar" by Daniel A Foxvog, used under CC BY 4.0.

Licensed under CC BY 4.0 by uyum.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

<https://kurnugia.com>